はまのみつくし

今國にて和歌よまる人のこゝろのおほかるらく
まいるやまとたましひはみかとのこゝろにて
も神代よりの事あひゝいへとしかとあけらかなら
神のみことのみことのたまひしことのはのこと
れいのこゝろこし和歌の中に壽をいはひけるよしの
代ゝてのあまてらすおほ神とあふぎてきこえ
宿をさためし文のかきつけ乃ことある秋園の筆
乃縁まゐりすまへるをもとめてありさまを
示し文をも書きそへよとおもひけれは此のことは

讃[illegible]

[illegible]梓の[illegible]

[illegible]

文化丑秋のころ

[illegible]

つはものつくし

行暮て
木の下かけを
宿とせは
花やこよひの
あるしならまし

竹内惟徳郷

冬夜

見し恵し寝し一夜のしら雪　奇淵

近江の舟や一夜の宿も山さくら　吉備　一色

見ん據う孫て打き入日暮の探とふ　粟　左朝

高うしのふ旅や見のしら雪　豫洲　省夫

むかう龍あたしやまの原　いせ　孤膽

たかしたふく扇うけ見のうき雲　○○　淡水

まくらゐのわりかましう寒さかな　安芸　羽雪

はくらまのりし我なからしいはつくへ乃
あおくふかんのゑハちらし渡るゝもふるゝはい
かくらりておかくれるむ
ゐなむ東みすゝ霧や揺のうねあかし　さくら　岸松

舟饅頭屋

あれは志つまるまりしもふ禄かし
ほくゝ降風やけるのもみ津あゝ　くゑく　一扇
あゝ清や稲つか借て在志まれ　三井寺　手鄭
ミすゝ屋の朧ていうくあかこれ　ミうさ　柳梅
春風も志つまりてみりて春の海　琵琶湖　紀

はらはらと松林ゟのこに出す霰　李鳴　雲山

中の巻

算のくく秤ありし　ありあれたちふし

かくさしれ

名残も志のひとろや稜皇　それて　逢来

りすさすやろんをとしけよ紀　あそて　外法仁

村すすろ枝す白ひのとろかる　宰鳥　役加

種紙や西もひらしも風はり　いさ　魯家

ひつろもそとろくけら紙の穂　栗　宮一

笑やるうしふ宮を呼らり杖常　つくし　楽只

親雀

こゝろしけあとハ雪柳ゆふへ哉　うかう 千蕙

あさらはゝ荒まく鳴もさそはれし　栗 一路

ちるもの（の）こゝしろくさちぬ杉の声　駿府 而后

うちゆかし雀なきとまるみゝらし鳴る雪　寄洲

早梅にし

落ちる力ゆるみけしてかたの声　栗 弓雄

一乱ゆもちのめくなきえて出梅　つる 北方里

おとりよひくの落下のつよみ御身　ヽ 渋石

こゝろしのつまくれなゐもひとつ杉かな　五雲

不つまりしみしあかる葉かな　吾妻　玉芝

菖蒲ひきたゝ挿なりけ手の力こそ　呂酒

河はら田力

小松ひきちらす命て居まりけり　一帆

おとこし山菜ちらす雨や降　汝川

風のかみいくらもしろ菊杉の雪　平湧

すりひ芋茗荷のほゝ手まくれ　米邦

後望

むらしぐれよまい四國投聖ら市地妻

ちぬ 石自

石投るをつるし菊の白ふ

わらさ 雲居

しもつきて力をあすら雪の條

吉備 烏村

富士投杉

梅も落ちて居しれぬ世なれ

伊勢 蕉星

猪乃二夜ありけや大幟

ちぬ 荷雨

投物や口投し首乃子ふ形く

五坂 柳星

桂首ふる声よあらしも一月氣

わらさ 雲水

くらしや無もものの雨町なる秋

吾嬬 南井

三浦

雲雀の羽ぶしの一声あたゝかなり　ふうしや 風車

肉くちや柳の屑菜の一きれかし　、　是興

こゝろまゝの白鷺もしなひらをの羽　蕉里

春過ぎや雪もまぎれんの朝ざくら　去石 可濤

笠まきし八の字あかいちら白に蝶らぶ　立治 其梅

黄鳥や花とるものもさそはれて　ことしか 宗雅

めしてやつるゝ栖に雨のよはふるら　瓊浦 子翁

ちゝの風我ならんもまのまれ　水口 道雄

義ら人

こゝろしの時雨すゝや鶉のこゑ　臼杵 松唐

あつまるひくや華洛の京吹て　浪華 可笑濤

次ひろ友久をすり貝拾ふや　吉洞

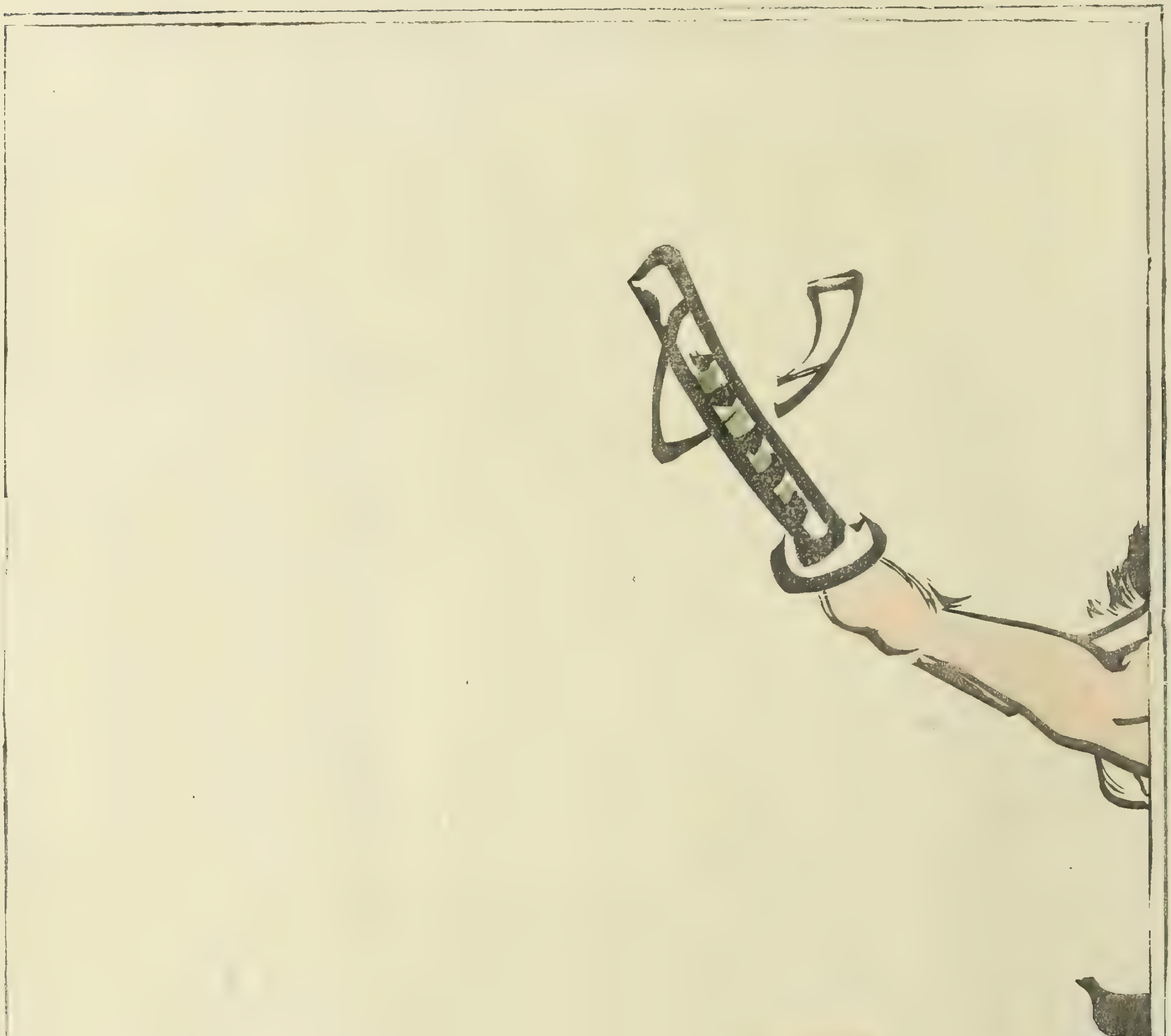
楠

きつきつけくつゆ飲やしく

大覚まもりまもり来るのしらく存あまり

しらかむ

遠浅のしゝ乳右ちゝみ時鷲君らしめ　ちよ 春栄



やり梅の中咲かゝり白露　あふミ八幡　蒿葉道

みすゝしむ穴一粒づゝ添れ枝の露　くはき　桃枝

うつむいて居るや桶の通ひ八作　西国　宋円

笠人気のうへもりかゝ向て鳴かゝり　江戸中　嘯らく

えもかし川のむかしを思ひて

うハゝ涙をふりすえて呼や都鳥　さいかい　守英

ちるとり姥等につれゆく牡丹哉　ゞう　善ヤ

秋の名照月のうへミるえへくにより　甘い　桔

ゆくすもゝへしめるむかう秋人　唐しう　白圭

あさつゆやあつき揺る音　英之

秋のつゆくちりしふつて知る　吐渕

見ぬ世まで涼しさや備の音　茶在

こよひよき流れの蛙みん寝覚　秋杖

人の皃しらぬくこゝろしめ夜の雪　寄渕

さつきまで清き入る菊の宿かな　揺亭

秋もみせ咲き揺ら清いて宿涼し　寄渕

春

初湯二日

まつのうちあかるき風呂の八ツ時分　江戸本町 晩翠

二日湯にあつ桶の手ぬくひ霞さへ　類栽

富士の雪七八合目もなかれ　静里

つりすまれちゃい陽雪あらたの息　玉叟

まみふれや初湯の人の思ひやく　女 蓮枝

三日月のふところにかくれ女松の上　三窓

初湯くやわかれの縁をわかすまき　自楽

向ふ綫の雪もはや八重の哉　三峰

てふしのしらまくら紅葉哉　秋花

峰さいて嶺し日やうすつきたる　力巣

咲やうら菊みけ雪ふ桜の花一本　(桑は)桑来

男人多ふよ大きされさ熊よ鴻の声　(それハ)雪花

宗あれハ森もこかれて鳴る鐘　(借)枯價

花もたや寂一つらとまりけり　(うつき)秋之

野分のあとしや樹の影するふ　(かわ)何之

日の匂ひまきや池付の後に　(あらや)花玩

ぬす人をとらえて梅の枝ながら　貫古

すゞめの音は若葉に隠れ鳴かな　白子　箕村

藪あるゝ梅あり家はもとはかり　木精

高野のすやはもの咲べき梅もなし　姥堂　雪居

花さかりけしからぬと折れる吉野山　有香

弁慶の筆を阿すゝの桜かな　奥州　鬼洞

梅ある宿しりがほの雨来　伊勢　亜扶

春めらくゞ香をたつぬと梅に入ぬるふ　京　冬香

むつましう梅か出るゝ山里かな　土佐　雪明

ちりて后河舟ゆくし窓の雲　栗本 雨暁

まつ梅やさき年まちかねぬ月桜哉　湘鳥

ゆふ暮のかくへてしまり梅の花　千子

持ちりてあはれ白梅咲にけり　斎桂

またえたる月や桜のしのゝ嶺　東波 九野

ひとめまつ鞍もしらすむかふの人　蕪菁

折る枝もしとゝやさくらしものの雪　年棟

一はつゝ梅も木深しちるみ寺　日向 月雄

首夏

引おろす人も間して蚊帳かな　江華　乙彦

明けてなほ暮らるゝや雪の足あとか　君竹

うらひしうしろへ行ておく扇かな　梅輪

今鏡ちるや花もしつる夏ひさを　野橘

しらしめぬくせあらむ桜かし　赤羽　傳亮

雨の雫かゝる蕗也笠の上　栗　古関

柳より露や種の手向てまた咲し　弘前　玉之

あふさに山見えて唐の花かな　あをや　我嵐

うつほりう螢杖崩すこちや　呂定

ほうせ代かくゝろすゝして夜鍛冶　蛤ノ和泉　里涯

宵のまのしまく御所の丸に宵月夜　長崎　探子

秋

淡つく森きさゝは薄八や月夜霞　宇和八　三四

手まくんにかくこゝろみありうれ　松犬

打くり並升ゝも知ぬ秋のつゆ　常紅

其うくよ様のさゝも菊の口　金沢　古乙

広り捷くへしきのくゝぬ岩石ふ　伊賀　鳳尾

温様のよそ末八ゞ稲を植て月　長崎　波月子

稲妻やむかしつらしもあら雲　伊勢　田丸

白萩のゆふこす籬にこぼれける　月守

寺の灯のゆりとあくる涼の小根　蕉谷

露の玉ハらりめとゆすりつめし　白章

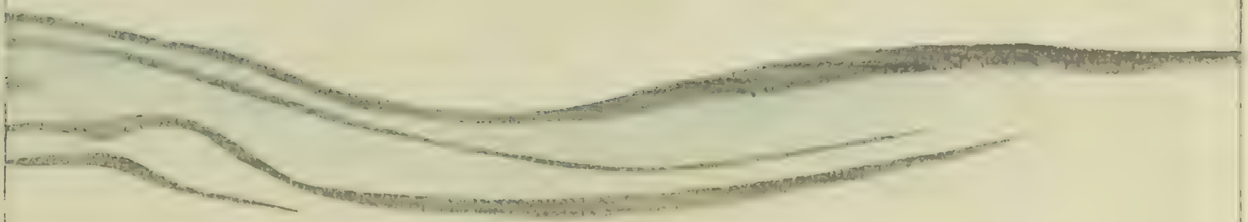
大はしは草うきぜにつくし露　枝角

あくまさすや菖蒲のさむのうら　暮四

をさの秋露ほに鳴きぬ　宇治　蝶々人

そよかしの音つとゑんすゞ盆の露　若狭　深文

いまさらにやゆるの枝しまらぬ稲　四ゆ　南金



きゝ秋合てし我ゝそとて咲ふ土用 石浜 英之

吉野も雨乃かゝりや横川の蛙 江戸 東湖

しかる縄しもをふ駆へしもう浦涛ふ 蕉雨

ゆきの秋も明やすし月の方 京 乳牛

ほとゝぎす血のしたれる日新や菊の色 嵯峨 有宗

うくしと風呂しまき見す月秋に 構丈

四五町まで洛の方をかゝるつ田かな 太甫

冬

やまはとの雪まよくへる時雨かな 江速 青鳥

むすんでも柳されかゝるまゝかな　吾荏

それハ
とらむすびしらきさみだ蝶茎尾ぞ　牧友

浅
かへるの生つゝむまえ春うら柳の風　賀儀

ひの
白も川もいとゆるやこゝまゝい　土明

ちるさくるかならの山の花もみ風　松郎

下絹
雲風の影よみとれやさゝまゝら　東澤

人の親うらうらや母ぬ柳の宮　萬籟

聖
こらしいのこふまえあんふの風　呉柳

穆斎
風ぞ庭ゝ梅やるの柳ゝ打ちを芝ちゝす　孫禾

なでしこに
かかる涙や
くすの露

嗚呼忠臣楠子之碑
石心鐵肝仕人之情

三州恩府 延長者書

かくしてかゝる居てもかゝりけり日　あたへ　子子ふ余

ちかきころめてたき石干をこゝや調ゝ　杉苗　雨石

こゝろしやかなる縁のあるも、文代

難波の集末にあつし小隣、乙園

原ならへ予門田ハその田かぬ、有畔

追加

梅

花ちりまたに志ゝゝ菊の白し　以下風報華　以字母益

Vault Collection

ND
1059
.S325
T78
1805

L. Tom Perry Special Collections
Harold B. Lee Library
Brigham Young University

BRIGHAM YOUNG UNIVERSITY
3 1197 23870 9155

楊百翰大學圖書館藏